

そ の 他

## 授業改善におけるFDワークショップの新たな方向性 ～学生参加型の意義～

21世紀教育センター高等教育研究開発室 土持ゲリー法一

### はじめに

アメリカでは、現在、FDという表現をあまり用いていない。その理由は、授業改善はファカルティ（教員）だけでできるものでないとの考えがあるからである。授業改善は、誰のために、何のためにするのかという根本的なことが問われなければならない。アメリカではFDを「ティーチング・エクサレンス（優れた授業）」として、授業改善に向けての総合的な取り組みであると位置づけている。大阪府立大学では、FDのことを「大学の教育を良くするための組織的な取り組み」と定義づけ、「カリキュラムの整備、学生の履修指導、授業時間外の学習指導といった直接的なものだけではなく、図書館の自学室のスペースを拡充してTAを配置するといった学習環境の整備も含まれます。（後略）」〔詳細は、大阪府立大学高等教育開発センター『フォーラム』（創刊号、2005年）を参照〕と広義に捉えている。

筆者の21世紀教育テーマ科目「国際社会を考える（D）―日米大学の比較から見た教育と研究の現状」では、日米大学におけるシラバスやFDの違いについても議論しているが、学生からFDの概念について、これは大学だけで「市民権」を得ている「狭義」な定義であり、広義におけるFDの取り組みへの努力が必要ではないかとのフィードバックがあった。尤もである。一般社会において、大学教員が教育の質を向上させるためにFD研修を行っているというのでは「市民権」を得ることは難しい。なぜなら、大学教員は「教育職」にあり、教えるプロ（専門職）であるとの通念があるからである。今後は、ティーチング・エクサレンスのように、大学教育全体を総合的に高めるための取り組みが不可欠であり、そのためにも学生参加型のFD活動が強く求められる。

岡山大学が、2001年度から本格的に取り組んでいる「学生参画型授業改善」は注目に値する。これは、2000年6月に「教員中心の大学から学生中心の大学へ」の転換を促した旧文部省の報告書（「広中レポート」）の影響を受けたものである。一般的に、教育改善というと狭義のFDと捉えがちであった。事実、岡山大学でも「FDのような教員側の問題に学生が口を挟む必要があるのか、また学生にその能力があるのか」という疑念の声があった。しかし、教育改善は、決して「教員側の問題」だけではなく、「学生と教員との双方の問題」であり、内容によって職員も巻き込んだ「大学全体の問題」（広義のSDの問題）であるとして、「学生参画型教育改善」を推進した。岡山大学の取り組みは、先駆的な役割を果たした。FDを大学教育全般の改善のための組織的活動の総体と捉え、そこでの学生の果たすべき役割や学生のあべき姿を重視するならば、より積極的に学生を巻き込む必要があるとの結論に達している。その理由として3点をあげている。第一に、FDが誰のためのものかという根本的な考えである。たとえば、「授業能力の資質向上」は、決して、教員自身の成長が第一義的でなく、そのことによって授業を受ける学生が「より理解しやすく」「より意義のある」学習が可能になることが本来の目標のはずである。そうであれば、教員側の改善努力が学生の学習改善に有機的に繋がるように、受益者たる学生の意見を積極的に採り入れることは、FDにとって自然な帰結である。

第二点は、学生自身の意識改革がFDにとって不可欠である。FDによって大学教育を変えようとしても、学生たちがそれに呼応しなければ、FDの意義は半減する。大学教育の大衆化・実践化の中で学生が

自ら積極的に学ぶための環境づくりが必要であるとして、中央教育審議会の答申「単位の実質化」を先取りしている。

第三に、こうした活動に学生が積極的に関与することで、学生自身の精神的・知的成長を促し、積極的な行動力を涵養する教育的効果がある。現代の若者が「指示待ち症候群」の言葉で代表されるような受動的側面を改善して、能動的学習への変換が期待できる、をあげている〔詳細は、橋本勝「FDと学生力―岡山大学 学生・教員FD検討会の1年―」『京都大学高等教育研究』(第8号、2002年)を参照〕。

FDが多様な学生を効果的に授業に導き、意欲的に学習させるための教授法を研修することであると考えるならば、授業でも多様な意見が反映されるような改善や工夫が求められるはずである。そのために学生が主体的に参加するFDワークショップが望ましい。

秋田大学全学FDワークショップ「授業デザイン～学生参加型授業を中心として～」も注目に値するものでFDの理想型といえる。FDワークショップの成否の鍵は、学生の積極的な参加と事前のガイダンスによる周到な準備にあると位置づけている。同大学では、参加費等は大学側から支援があり、徹底した事前のオリエンテーションを踏まえるために、参加者学生からの評価も高い。何よりも、教員だけではわからない着眼点や柔軟な発想が相互の議論を高め、その結果、授業シラバスにも学生が意欲的に参加したくなる授業設計となっている。同大学の全学FDワークショップの実施要綱によれば、学習者中心の大学教育を行い、幅広い教養と深い専門性、豊かな人間性と高度の倫理を備えた人材を育成することを中期目標に掲げ、この目標達成の方策の一つとして成績評価・授業デザインに関するワークショップを実施している。授業デザインも学生参加型授業で、「学習者」中心の授業の充実に資することを目的として2004年度から実施され、2006年度は30名の教員に加えて、20名の学生の参加の協力を得て実施された。学生の参加費用は、学長裁量経費から支出されていることから秋田大学の授業改善への取り組み姿勢を伺うことができる。

本学においてもFDワークショップ活動を充実させ、授業シラバスの見直し、ラーニング・ポートフォリオを活用した成績評価の量から質への転換を目指しているが、教員だけのグループ作業に学生を参画させることで、これまで気づけなかった学生の視点に立った授業設計（シラバス）に繋げることができるものと期待される。

（備考：『21世紀教育センターニュース』より転載）